

『宇治拾遺物語』における和歌説話の配列

——第百四十九・百五十・百五十一話の場合——

小野 のぞみ

(一)

『宇治拾遺物語』全百九十七話中に、和歌を載せる説話が十五話あり、都合十八首の和歌(うち一首は連歌)が収められている。この内、特に第四十話から第四十三話、第百四十六話から第百五十話は、和歌を載せる説話が連続して配列されている。仮に前者を和歌説話群Ⅰ、後者を和歌説話群Ⅱと呼ぶ。少なくともこの部分に限っては、「和歌」に関する話が重視され意図的に編集されていることは間違いない。

稿者は、先に、第百十一話「歌詠みて罪を許さる事」の「年を経て頭の雪はつれどもしもと見るにぞ身は冷えにける」という和歌について検討した。¹⁾『宇治拾遺物語』に載る和歌は、諸伝本の間でさほど大きな異文がなく、同じ説話を載せる『今昔物語集』『古本説話集』や歌集などその他の文献にまで広げても、ほぼ同じことが言えるが、中には和歌の質にまで関わる重大な異文の見られるものもあり、一々の歌について所載和歌の本文の差異を確認することは、各伝本の、そして各説話集の、書写や改変の在り方の一端を追及する手続きとして欠かせない、という提言を行った。

本論においては、和歌説話群Ⅱのうちの、第百四十九話「貫之歌の事」、第百五十話「東人、歌詠む事」および第百五十一話「河原院融公の霊住む事」の配列について考える。前稿とは異なった観点から、『宇治拾遺物語』

における和歌の役割を考えたのである。

第百五十話「東人、歌詠む事」は紀貫之が東人のように詠んだという説話であり、前の二つの説話にはどちらも紀貫之が関わっている。第百五十一話に貫之は登場しないが、『古本説話集』に載る同話を見ると、これも実は貫之も関わって伝えられていた話である。

『宇治拾遺物語』の説話配列に関する先学のご研究には、全巻を通して検討したものととして、小出素子氏²⁾や小林保治氏³⁾のものがある。両氏の示される第百四十九・百五十・百五十一話とその前後の説話の把握は以下の通りである。

小出氏

百四十八—百四十九 身の不幸を詠んだ歌

百四十九—百五十 貫之が地方で詠んだ歌

百五十—百五十一 河原院

百五十一—百五十二 ただならぬ人(帝/童)にやり込められる

小林氏

百四十八 老侍の即興の題詠歌 身の不幸を詠む

百四十九 貫之の亡兄への挽歌 はかない死別 身の不幸を詠む

百五十 貫之の東国調の詠歌 はかない螢火と人魂

百五十一 陸奥の塩釜風の造庭 融の左大臣の幽霊 物に動じない物言い

百五十二 唐の孔子と童 碩学を驚かす 物怖じしない物言い

両氏とも、第百四十九・百五十話については「貫之」という共通点を見ておられるが、第百五十一話については貫之には言及されていない。また、和歌の字句表現についての吟味もない。

そこで、これらの説話の貫之の和歌の本文を、『宇治拾遺物語』万治二年林和泉版行本を底本とし、『宇治拾遺物語』諸本および他の文献諸本に

載るものについて対校し、『宇治拾遺物語』編者の和歌説話の中心的題材である和歌の採り上げ方を検討する。また、これらの説話の配列原理には和歌そのものの内容と表現が深く関わっている、ということ仮説として検証する。そうすることによって、『宇治拾遺物語』編者の説話再構成の目指したところの一端が解明できると考えるからである。

〈二〉

まず、第四百十九話「貫之歌の事」を検討する。³⁾ (傍線筆者、以下同。)

今は昔、貫之が土佐守になりて下りてありける程に、任果ての年、七つ八つばかりの子の、えもいはずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが、とかくわづらひて失せにければ、泣き惑ひて、病づくばかり思ひこがる程に、月比になりぬれば、かくてのみあるべき事かは、上りなんと思ふに、「児のこにて何とありしやは」など思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ、柱に書きつけける。

都へと思ふにつけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり

と書きつけたりける歌なん今までありける。

この話の素材源は『土佐日記』承平四年十二月二十七日条であり、同話・類話・関連作品としては、同文的同話である『古本説話集』上巻第四十一話、同文ではないが同話である『今昔物語集』巻第二十四第四十三話、和歌に関しては、『和歌体十種』の「直休」(義実以無曲折為得耳)に載る。

この話の原拠となった『土佐日記』の本話に係のある部分を掲げる。⁴⁾

二十七日。大津より浦戸を指して漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生まれたりし女子、国にてはかに亡せにしかば、このごろの出で立ちいそぎを見れど、何ごともいはず。京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲し

び恋ふる。ある人々もえ堪えず。このあひだに、ある人の書きて出だせ
る歌、

みやこへと思ふをものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり
また、ある時には、

あるものと忘れつつなほなき人をいつらととふぞかなしかりける
といひけるあひだに、鹿児の崎といふところに、守の兄弟、またこと人
これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下りゐて別れがたきことをいふ。

(後略)

亡児哀悼は『土佐日記』の重要な主題のひとつであり、亡児についての記述がはじめて現れるのが二十七日条である。『土佐日記』は、本編中で貫之は登場人物の一人であり、ある女性によって語られる。だが、貫之の作であると考えてよく、『宇治拾遺物語』も、そう受け取って『土佐日記』十二月二十七日条の記事を元にこの話を創作したものと思われる。

これらの話を比較してみるに、『土佐日記』では「ある人」が亡くしたのは「京にて生まれたりし女子」であるが、『宇治拾遺物語』『古本説話集』では「七つ八つばかりの子の、えもいはずをかしげなる」、『今昔物語集』では「男子」である。『尊卑分脈』によると、貫之には「内蔵助」の「時文」と「助内侍」で「歌人古今作者」の「女子」がいる。本話で貫之が亡くした「七つ八つばかりの子」には当たらない。だが、幼くて亡くなった子供は系図に載せないことも有り得る。土佐で亡くした子の実否は不明である。

『土佐日記』の亡児哀悼を虚構とする説もある。⁵⁾醍醐天皇の死によって『新撰和歌集』が勅撰集たり得なくなり、更に庇護者であった藤原兼輔をも亡くしてしまったという喪失感が託されたのが亡児である、というのがその説である。尤もその実否は不明である。

もともと『土佐日記』が「女子」としたものを『古本説話集』や『宇治拾遺物語』が単に「子」としているのは、この話では、貫之の悲しみとこの和歌の良さが伝わればよいのであって、子供の性別については特にこだわらない、という態度なのである。

『今昔物語集』が「男子」としているのは何故だろうか。『土佐日記』の冒頭は、知られるように、

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり

という一文で始まる。だが、『土佐日記』は男性である貫之の作である。『今昔物語集』は、事実とは男女が逆転して記されているものと見て、「女子」を「男子」に直したのではないだろうか。

他に、『土佐日記』と『宇治拾遺物語』との差異として、『土佐日記』に「女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。」とのみあったものが、「泣き感ひて、病づくばかり思ひこがるる程に、月比になりぬれば、かくてのみあるべき事かは、上りなと思ふに、「児のこにて何とありしやは」など思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ」と、悲しむ様子が詳しく描写されている点が挙げられる。また、『土佐日記』では単に「書きて出だせる歌」とあったものが、「柱に書きつけける。」と書きつけたりける歌なん今までありける。」と、柱に和歌を残したことになる。このように、原拠『土佐日記』と『宇治拾遺物語』とは大きく相違するのである。

次に、和歌の本文について見る。この和歌は『宇治拾遺物語』および『古本説話集』、『土佐日記』、『今昔物語集』、『和歌体十種』に載るが、それぞれの作品の諸本を見ると、和歌には細かな差異がある。表記の差異をも提示してみる（伝本略称については補注参照）。

『宇治拾遺物語』

万治 みやこへとおもふにつけてかなしきはかへらぬ人・のあれはなりけり
河乙 宮・ 思・ ○に 悲・し×ハ婦・ ○ハ也・

『今昔物語集』

実践 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

カリ ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

内閣 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

丹鶴 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

攷証 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

筑甲 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

筑乙 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

史籍 思・ 心・のわひしきハ
にもつかなし士

東洋 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

内乙 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

内丙 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

彰考 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

蓬左 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

陽明 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

本居 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

大和 ミヤコヘト思・フ心・ノワビシキハカヘラヌ・ノアレバナリケリ

『土佐日記』

青谿 おもふをものゝ ひと

宗綱 都・ おもふをものゝ ば

定家 思・ふものゝ

群書 都・ 思・ふものゝ悲・

日大	都・	おもふをものゝ	ハ	・	ハ
三條		おもふをものゝ		・	ハ
東芸	都・	おもふもものゝ悲・	ハ	・	
蓬甲	京・	おも思・フヲ物・ノ悲・シキハ帰・ラヌ	・ノ有・ハナリケリ	・	ハ
蓬乙		おもふをものゝ	ハ	・	ハ
陽甲	都・	おもへともものゝ	ハ	・	ハ
陽乙	都・	おもへともものゝ	ハ	・	ハ
陽丙		思・ふもものゝ	ハ	・	ハ
桑名	ミ	おもふもものゝ	ハ	・	ハ也・
刈谷	京・	おも思・フヲ物・ノ悲・シキハ帰・ラヌ	・ノ有・ハナリケリ	・	ハ
北海	ミ	おもふもものゝ	ハ	・	ハ
国雁	ミ	思・ふをものゝ	ハ	・	ハ
盛博		思・ふもものゝ		・	
東奥		思・ふもものゝ		・	
高山	ミ	おもふにものゝ	ハ	・	ハ
中田	京・	思・ふを物・の悲・	帰・	・	也・
金沢	京・	おも思・フヲ物・ノ悲・	キハ飯・ラヌ	・ノアレハナリケリ	
東大	京・	おも思・フヲ物・ノ悲・	キハ飯・ラヌ	・ノアレハナリケリ	
多和	都・	おもふをものゝ	ハ	・	
万治	都・	思・ふも物・の悲・	ハ	・	
季吟	ミ	おもふもものゝ	ハ	・	ハ
首書	ミ	思・ふもものゝ悲・	ハ	・	ハ
土燈		おもふにものゝ	ハ	・	ハ
考燈		思・ふもものゝ	ハ	・	ハ
創見		おもふもものゝ	ハ	・	ハ

記解	都・	おもふも物・の	・	ハ
直路		おもふもものゝ	・	ハ
講注	京・	思・ふも物・の	・	ハ
富士	都・	おもふに物・の	・	ハ
名古		おもふにものゝ	・	ハ
正釈		思・ふもものゝ悲・	・	ハ
国文	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
函館	都・	おもふも物・の悲・	ハ帰・	成・
陽明	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
書甲	都・	思・ふも物・の	・	ハ
書乙	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
百合	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
盛岡	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
神宮	ミ	思・ふもものゝ	・	ハ
『和歌体十種』				
高野	ミ	いそくにものゝ	ハ	ハ

まず第二句は、説話の原拠『土佐日記』諸本では「思ふをもの」とあるが、『今昔物語集』諸本では「思ふ心ノ」、『古本説話集』、『宇治拾遺物語』諸本では「思ふにつけて」とある。『土佐日記』の「ものの悲しき」を、「物悲し」に音数律を整えるために「の」を加えたものと見ると、「物悲し」は、「何となく悲しい。うら悲しい」という意である。これは、激しい悲しみを表す字句表現としては適さない。そのために、『今昔物語集』『古本説話集』『宇治拾遺物語』では改めたのであろう。

『和歌体十種』のみ、「急ぐにもの悲しきは」とある。「思ふに」と比

較すると、都恋しさはより強く表出されているが、都に帰ろうと急いでいるという点で、すでに悲しみが薄れている字句表現と言えなくはない。

また、第三句、『土佐日記』『宇治拾遺物語』『古本説話集』では「悲しきは」とあるのに、『今昔物語集』では「ワビシキハ」とある。だが、『今昔物語集』において、和歌の直前の地の文には、「彼児ノ此ニテ此彼遊ビシ事ナド思ヒ被出テ、極ク悲ク思ヘケレバ、」とあり、和歌に込められている気持ちは、『土佐日記』などと同様に、悲哀であることが読み取れる。

「悲しき」でも「わびしき」でも、どちらにしても意味は通る。しかし、語義上から「悲しき」が妥当であろう。「わびし」という語の原義は、中田祝夫氏〔他〕編『古語大辞典』（小学館 昭和五十八年十二月）によれば、

物事が思い通りにならず困惑し、苦悩する心情を表す点にある。（原田芳起氏執筆）

ということである。一方、「かなし」は、

対象に対する愛情が痛切に迫って心のかき立てられるさまを表し、愛惜の情にも、悲哀の情にもいう。（執筆者名記載なし）

ということである。「わびし」よりも「かなし」の方が、貴之の、子への想いが、より率直に表出されるのである。

実は『今昔物語集』には、この歌の他にも、元々「わびしき」ではなかった和歌のことは「わびしき」と改めて載せている例がある。卷三十一「藤原惟規於越中国死語第二十八」に載る和歌がそれである。歌道に執心する藤原惟規が、自身の死に臨んで、

ミヤコニモワビシキ人ノアマタアレバナヲコノタビハイカムトゾオモフ
という和歌を詠むのであるが、この和歌は、『俊頼髓脳』（初句「みやこに」は、「世継物語」、『後拾遺和歌集』に、第二句を「恋しき人の」として

収められている。

これら『今昔物語集』の元々「わびしき」ではなかったものを「わびしき」と言い換える例を見るに、『今昔物語集』は、死を隔てたもう二度と逢えない大切な人を想う感情について、「わびしき」という語を用いているという共通性がある。

なお、『千載和歌集』に、『宇治拾遺物語』に載る歌とまったく同じ上句を持つ和歌が載る。

あがたに侍けるほどに京なる女身まかりぬるときゝていそぎのぼ

り侍けるみちにてよめる

源實基朝臣

ミヤこへとおもふにつけてかなしきハたれかハいまハ我をまつらん

（巻第9・哀傷・568）

詠者源実基は、『尊卑分脈』によると、源隆国と従兄弟同士である。源隆国は、『宇治拾遺物語』序文にその名が見え、『宇治大納言物語』の作者とされている人物である。『宇治大納言物語』は、現在は散逸してしまっているが、『宇治拾遺物語』の前身であるとも言われている。あるいは、『宇治拾遺物語』のこの歌は、『千載和歌集』の源実基の歌の影響の下に、この形になったのかもしれない。

〈三〉

次に、第百五十話「東人、歌詠む事」について検討する。

今は昔、東人の、歌いみじう好み詠みけるが、螢を見て、

あなてりや虫のしや尻に火のつきて小人玉とも見えわたるかな

東人のやうに詠まんとて、まことは貴之が詠みたりけるとぞ。

『古本説話集』第二十二話に同文的同話が載る。また時代が下るが、同じ話が『醒睡笑』巻八にも載る。『醒睡笑』は東大本一本のみを代表させ

るとして、諸本の本文を比較してみる。

『宇治拾遺物語』

万治 あなてりやむしのしや尿・に火のつきてこ人・玉・ともみえわたるぞ・

陽明 虫・ 渡・るかな

伊達 虫・ 哉・

書陵 虫・ かな

龍門 虫・ かな

九大 虫・ 見 かな

蓬左 虫・ 哉・

河甲 虫・ 渡・ 哉・

河乙 虫・ 付・ 光敷・ 見 かな

古活 虫・ 哉・

『古本説話集』

梅沢 しりひ ひとたま かな

『醒睡笑』

東大 る虫・ たま 見 かな

第一句「あなてりや」が、『宇治拾遺物語』伊達本で、「あなてるや」となっている。『醒睡笑』諸本も同様である。その「てりや」について、新編日本古典文学全集頭注は、

京言葉で「てるや（照るや）」とあるべきところを訛ったか。

と解説している。「てるや」では正格の京言葉なのである。この和歌の面白味は東国の方言を使つて和歌を詠んだということにあるので、ここは「てりや」でなければならない。『宇治拾遺物語』伊達本や『醒睡笑』諸本では、そのことに気が付かず、正格の京言葉に直してしまったのである。

第四句「小人魂とも」が、『宇治拾遺物語』河乙本で「元玉とも」となっていて、「元」を見せ消ちにし、右側に「光敷」とある。『醒睡笑』の全集本では「こへ」たまとも」となっている。ともに歌意が通じない。それぞれ「こ人」を一文字に、「人」を「へ」に誤ったのである。

第五句を、底本とした『宇治拾遺物語』万治本は「見えわたるぞ」とする。他本はすべて「見えわたるかな」である。「見えわたるぞ」でも意味は通じるが、字足らずである。「見えわたるかな」であるべきところである。

（四）

第五百十一話「河原院融公の霊住む事」について検討する。

河原院は、かつては融左大臣の邸であつたが、大臣の没後、宇多院に献上された。ある夜、河原院にいた宇多院の前に融の幽霊が出たが、道理を説いて退散させた、という話である。

本話は『古本説話集』第二十七話の前半部と同文的同話である。ただ、そこでは、更に後の代の荒れ果てた河原院の件が語られ、眞之、能因、道濟の和歌が載り、和歌説話となっている。『今昔物語集』では、巻第二十七第二「川原院融左大臣霊宇陀院見給語」に『古本説話集』第二十七話前半部の融の霊の話が、巻第二十四第四十六「於河原院歌読共来説和歌語」に後半部の和歌の話が、別々に載っている。

『古本説話集』に載る河原院についての二つの話を併せて一話とする形よりも、『今昔物語集』に載るように一話ずつ別の説話とする形の方が本来的である、という考え方も成り立ち得る。だが、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』と『古本説話集』との共通話の本文を比較してみた場合、『宇治拾遺物語』と『古本説話集』の本文が近い。

それに、この第百五十一話以外にも、元々は二つの話をまとめた説話であつたものを、『古本説話集』ではそのまま載せ、『宇治拾遺物語』では片方を切り捨てているという例がある。『宇治拾遺物語』第百四十六話「季直少将歌の事」がそれである。季直少将という人が病氣になつて、少し良くなつたので内裏に参上し、公忠に「明後日また」と言つて退出したが、三日ほど経つて「くやくしくぞのちにあはむと契りける今日をかぎりといはましものを」という和歌を詠んでその日の内に死んでしまつた、という話である。

『古本説話集』第十一話では、この話の前に、山吹の花の見頃に大井に行こうと言つたのを忘れていた帝に、少将が山吹が見頃ですよという和歌を詠みかけるといふ話が語られている。これと同話が『大和物語』『世継物語』にも載るが、いずれも山吹の話をも載せている。

『今昔物語集』に載る、一話ずつ別の説話とする形が本来的であるのか、二つの話を一話とする形が本来的であるかは分からないけれども、『宇治拾遺物語』や『古本説話集』が参照した先行文献では、二つの話を併記し一話の説話とする形であつた、と考えてよからう。

『古本説話集』では、この河原院の話は、貫之の

君なくて煙絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな

という和歌を載せる和歌説話である。

この「君なくて」の歌は、『古今和歌集』巻第九哀傷852（初句「君まさで」）、『貫之集』巻第八哀傷747（初句「君まさで」）、『古今和歌六帖』、『和漢朗詠集』538（第五句「なりにけるかな」）にも載る。初句は、貫之自身等の編んだ『古今和歌集』で「君まさで」であるから、本来的には「君まさで」であつた。『今昔物語集』でも「キミマサデ」である。第五句は、『和漢朗詠集』のみ「なりにけるかな」である。第百五十話に載

る歌の第五句が「見えわたるかな」であるので、二話のつながりを考えると、第百五十一話も「見えわたるかな」とありたい。

（五）

最後に、第百四十九・百五十・百五十一話の間のつながりについて検討する。

まず、第百四十九・百五十話。第百五十話に載る和歌は、俗語や「尻」など、あまり和歌には詠まれないものが詠みこまれており、諸注釈書では、滑稽な歌として解釈されている。だが、この歌はそれだけの和歌として読むのは適切ではない。第百四十九話の亡き子を悼む貫之の話の後にこの第百五十話を見る時、この和歌には単なる滑稽とは言えない意味が付与されていることがわかる。

貫之は、任国土佐で「限りなくかなしうし」ていた「えもいはずをかしげなる」子を亡くした。何を見るにつけても「児のここにて何とありしやは」など思ひ出でられ「た。子を想つて貫之が書きつけた歌が「今までありける」といふのは、書き付けられた墨の文字が語りの「今」まで消えずに残っているという意味であり、それと重ねて貫之の悲しみも鮮やかなままであることが強調されているのである。それが第百四十九話である。

この延長線上に第百五十話を見ると、貫之が小さな螢の飛ぶのを見て、そのほのかな小さな光を子供の魂であるかと思ひ、あふれてくる涙を笑いで紛らそうとしたものと見ざるを得ない。「小人玉」はすなわち「小人魂」であり、それは「子供の人魂」なのである。笑いは笑いでも、かような意を込めた歌なのである。

『古本説話集』も、この貫之に関する二つの説話を載せるが、それぞれ第四十一話および第二十二話であり、この二話を並べることはない。『古

本説話集』では、第四十一話の前後は出家譚であり、世は憐しとする基本線上で、貫之の亡子の話が語られている。第二十二話の前後は有名歌人の説話が並べられており、特に直後に位置する第二十三話は、躬恒が同じく東人風の歌を詠んだという説話である。その流れを語るべく貫之が取り上げられていることは明白である。

貫之との関連の二話をこの順番で配したのは、『宇治拾遺物語』の工夫なのである。そして、『宇治拾遺物語』では貫之の件が削られているが、第百五十一話も実は貫之の和歌の關係する説話なのである。今ここに、再度それぞれの説話の中で詠まれている貫之の和歌を掲げる。

百四十九 都へと思ふにつけて悲しきは^{あな}婦らぬ人のあればなりけり

百五十 かななりや虫のしや尻に火のつきて^{あな}小人玉とも見えわたるかな

百五十一 君なくて煙絶えにし塩釜の浦さびしくも見えわたるかな

第百四十九話で「婦らぬ人」となつてしまつた貫之の幼い娘は、第百五十話の「小人玉」の儚い光に重なり、そのイメージは第百五十一話の「君なくて」ともなだらかに連続する。また、第百五十話と第百五十一話は「見えわたるかな」の語句が連続する。このように、所載和歌のイメージの連想、用語の連続に依る説話の配列がなされているのである。

『宇治拾遺物語』は、貫之の和歌の載る説話を三話並べ、なんらかの理由で、三話目の和歌部分を削つた、といえるのではないであらうか。

〈六〉

その「なんらかの理由」を考えるために、この和歌説話群Ⅱの少し前に配された説話を見てみる。

第百三十六話「出家功德の事」から、第百四十四話「聖宝僧正、一条大路渡る事」までは、尊い僧の話が配されている。その次に位置する第百四

十五話「穀断の聖露頭の事」は、何年も穀物を断つていと評判の法師が、物見高い公達に廁の排泄物をのぞき見られ、実は米を食べていたことが露頭し、逃げ去つた、という話である。

第百三十六話から第百四十四話までを順に読み進めてきた読者の頭の中には、「僧Ⅱありがたいもの」という価値観が形成されている。それが第百四十五話「穀断の聖露頭の事」によって逆転されるのである。

小峯和明氏は、聖宝の話の後に穀断聖のいかさま露頭の話がつけあわされていることについて、

《偽悪》と、《狂惑》が直接対比されるわけで、第一三六の老人の出家譚について、達磨・堤婆・慈恵・寂心・寂実・空也の逸話が続き、次に増賀・聖宝と並び、対照的に穀断聖がくるという実にダイナミックな展開となる。にせの穀断聖は直接に偽悪聖と対照されつつ、一連の高僧話群全体とも対比され、価値感を逆転ないし相対化させる重みをもつ。

と述べておられる。¹⁾それまで教話にわたり語ってきた価値観が逆転されることによつて、話題を転換するというのが『宇治拾遺物語』の方法であると考えやすい。第百四十五話と、第百四十六話との間に話題転換点があり、第百四十六話からはまた別の価値観にしたがつて話が語られている、と考えることができる。

これに続く和歌説話群Ⅱを見てみる。第百四十六話「季直少将歌の事」は少将の辞世の和歌説話である(悔しくぞ後に逢はんと契りける今日をかぎりといはましものを)。第百四十七話「木こり小童隠題歌の事」で詠まれている歌は隠題歌であり、実詠ではないが、そこには、散る桜が詠まれている(めぐりくる春々ごとに桜花いくたびちりき人に間はばや)。第百四十八話「高忠の侍、歌詠む事」は、不幸な最後には行方不明になつてし

もう老人が和歌を詠むという説話である(はだかなる我が身にかかる白雪はうちふるへども消えせざりけり)。第四百十九話「貫之歌の事」で詠まれている歌は、先に検討した貫之の子への挽歌である(都へと思ふにつけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり)。第五百十話「東人、歌詠む事」でよまれている歌の螢火は、人魂を連想させる(あなてりや虫のしや尻に火のつきて小人玉とも見えわたるかな)。このように見ると、和歌説話群Ⅱは「死」が語られる説話群でもあるといえる。

その和歌説話群Ⅱの後に配される第五百十一話「河原院融公の霊住む事」では、融の幽霊が宇多院に退散させられる。第五百十一話で語られるのは、その直前までの「死」ではなく、力強い「生」の勝利なのである。

『宇治拾遺物語』が、『古本説話集』に載るような二つの話を併記し一話の説話とする形から和歌を切り離して一話としたのは、和歌説話群Ⅱを通して語られた「死」を、より明確に、より劇的に、転換するためであると考えてよい。

(七)

煩雑にわたった本稿を整理しておく。

第四百十九話「貫之歌の事」の原拠は『土佐日記』承平四年十二月二十七日条で、同文的同話に『古本説話集』上巻第四十一話、同文ではないが同話である『今昔物語集』巻第二十四第四十三話があり、和歌に関しては、『和歌体十種』の「直体」にも載っているが、その和歌には大きな差異が存在した。歌の第二句は『土佐日記』では「思ふをもの悲しきは」とあるが、『今昔物語集』では「思ふ心ノワビシキハ」、『古本説話集』、『宇治拾遺物語』では「思ふにつけて悲しきは」、『和歌体十種』では「急ぐにもの悲しきは」とあった。また、『千載和歌集』に、『宇治拾遺物語』に

載る歌とまったく同じ上の句を持つ和歌が載り、その詠者源実基は、『宇治拾遺物語』序文に名が見える源隆国と従兄弟同士である。あるいはこの歌の影響の下にこの歌形の変化が起こったのかもしれない。

第五百十話「東人、歌詠む事」の和歌には、問題となる異文はない。

第五百十一話「河原院融公の霊住む事」は、『古本説話集』第二十七話の前半部と同文的同話であるが、そこでは、後半部に貫之らの和歌が載り、和歌説話となつてゐる。『今昔物語集』では、巻第二十七第二「河原院融左大臣霊宇陀院見給語」と巻第二十四第四十六「於河原院歌詠其来説和歌語」に分けられて載っている。『宇治拾遺物語』や『古本説話集』が参照した先行文献では、二つの話を併記し一話の説話とする形であった、と考えられる。

第四百十九・百五十・百五十一話の間のつながりを考えると、所載和歌の相互イメージからの連想、用語の連続に依る三話の配列がなされていることが確認された。『宇治拾遺物語』は、貫之の和歌の載る説話を三話並べ、その前に配される和歌説話群Ⅱを通して語られた「死」を、より明確に、より劇的に、転換するため、三話目の和歌部分を削った、と考えてよい。

『宇治拾遺物語』は、説話の内容と併せて、そこに載る和歌の内容と表現にふさわしい説話配列を行っていたのである。

〔注〕

- 1 拙稿『宇治拾遺物語』所収和歌の本文流伝——「年を経て頭の雪は積もれども」歌の検討——(『平家部会論集』第十集)
- 2 小山素子氏『宇治拾遺物語』の説話配列について——全巻にわたる連関表示の試

- み」『平安文学研究』67 昭和五十七年六月)
- 小林保治氏「説話連絡表」『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集50 (小学館 平成八年七月) 解説
- 説話本文の引用は、小林保治氏・増古和子氏校注・訳『宇治拾遺物語』新編日本古典文学全集50 (小学館 平成八年七月) による
- 『古本説話集』と『宇治拾遺物語』とは、散逸した先行文献から話を別々に引用したという兄弟関係であると考えられており、共通の母体としては、散逸『宇治大納言物語』が想定されている。
- 本文は菊地瑞彦氏・木村正中氏・伊牟田経久氏・清水好子氏校注・訳『土佐日記』新編古典日本文学全集13 (小学館 平成七年九月) による。
- たとえば長谷川政春氏は『紀貫之論』(新鋭研究叢書2 有精堂出版株式会社昭和五十九年十一月) において、『土佐日記』における幼女の死に関する場面を検討しておられるが、氏によるとそれは、
- (一) 都への船出に際して初めて幼女が追想され、都への憧憬に裏打ちされたもの。
- (二) 古今集羈旅部に並列された二首(四一・二番)に準拠したもの。
- (三) 藤原兼輔の子を想う親心の歌を背景とし、「死に子顔よかりき」の俗諺を利用したもの。
- (四) 住吉明神の歌語りを基層に、その住吉の歌枕「住の江」「忘れ草」「岸の姫松」をもつて作歌した歌びと貴之の面目を施したもの。
- (五) 惟喬親王・在原業平の渚の院の故事に誘発された氏族意識の高揚と、「昔時」と「今時」の認識から導き出された虚構。
- (六) 家の荒廃から死者を連想し追想するという伝統が作者の心の奥底に秘められ、藤原兼輔とその妻の死を悼んだ貴之自身の歌詠を原型にした虚構。
- であり、「幼女の死は作者の卓抜した虚構であった」と結論づけておられる。
- 馬淵和夫氏・国東文麿氏・稲垣泰一氏校注・訳『今昔物語集③』新編日本文学全集37 (小学館 平成十三年) の頭注に「男子としたのは編者の恣意的解釈か」との指摘がある。
- 本文は馬淵和夫氏・国東文麿氏・稲垣泰一氏校注・訳『今昔物語集③』新編日本文学全集37 (小学館 平成十三年) による。
- 第百三十八話「出家功德の事」、第百三十九話「遠磨、天竺の僧の行ひ見る事」、第百四十話「提婆菩薩、竜樹菩薩の許に参る事」、第百四十一話「慈恵僧正、受戒の日延引の事」、第百四十二話「内記上人、法師陰陽師の紙冠を破る事」、第百四十三話「持経者釈迦実効験の事」、第百四十四話「空也上人の臂、観音院僧正折り直す事」、第百四十五話「増賀上人、三条の宮に参り振舞の事」、第百四十六話「聖宝僧正、一条大路渡る事」。
- 小峯和明氏「宇治拾遺物語の表現時空」第2章「ひしめくもの」(若草書房中世

文学研究草書10 平成元年十一月)

〔補注〕本稿の検討において、国文学研究資料館収蔵マイクロ資料等によって調査した諸本および本稿における略号は以下の通りである。

『宇治拾遺物語』万治二年林和泉楼版行本(流布本) (略号: 万治)、陽明文庫本(2869) (陽明)、伊達本(伊達)、書院部本(書院、龍門文庫本(龍門)、九州大学文学部五冊本(別23) (九大)、蓬左文庫本(107-39) (蓬左)、今治市河野美術館五冊本(114-23) (今甲)、今治市河野美術館四冊本(114-23) (今乙)、無刊記古活字本(岩波文庫活字本) (古活)

『古本説話集』梅沢文庫本(孤本)

『今昔物語集』実践女子大学二十六冊本(新編日本古典文学全集) (実践)、カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館本(旧三井文庫本) (新日本古典文学

大系) (カリ)、内閣文庫本(林家旧蔵本) (日本古典文学大系) (内閣)、丹鶴叢書本(丹鶴)、東大田中頼康氏旧蔵本(改証今昔物語集) (改証)、筑波大学二十八冊本(ル120-83) (筑甲)、筑波大学十一行本(ル120-210) (筑乙)、史籍集覽本(史籍)、東洋文庫二十八冊本(東洋)、内閣文庫十七冊本(210-107) (内乙)、内閣文庫二十八冊本(210-106) (内甲)、内閣文庫二十八冊本(210-108) (内丙)、彰考館小山田与清三十二冊本(丑20) (彰考)、蓬左文庫二十八冊本(107-54) (蓬左)、陽明文庫十八冊本(55-276-1) (陽明)、東大本居文庫十四冊本(本居総195 国文565) (本居)、大和文庫館二十八冊本(3203-3229) (大和)

『土佐日記』青籟書屋本(青籟)、宗綱自筆本系(宮内府図書館本と近衛家本) (古典文庫) (宗綱)、定家自筆本(古典文庫) (定家)、群書類従本(活字本) (群書類)、日本大学図書館本(土佐日記総索引) (日大)、三條西家本(三條)、東京芸術大学附属図書館蔵本文庫本(B915-3-1) (東芸)、蓬左文庫一冊本(107-36) (蓬甲)、蓬左文庫一冊本(234) (蓬乙)、陽明文庫一冊本(2314) (陽甲)、陽明文庫一冊本(E349) (陽乙)、陽明文庫一冊本(E350) (陽丙)、桑名市立文化美術館秋山一冊本(24) (桑名)、刈谷図書館『土佐日記異本』一冊(106) (刈谷)、北海学園大学付属図書館北郷文庫一冊本(義286) (北海)、国文研初雁文庫本(25) (国雁)、歴史博物館高松宮本(25) (歴博)、東奥義塾一冊本(E339) (東奥)、高山郷土館『土佐日記』靜舎大人註(鶴居大人補) (紀行部28) (高山)、中田剛直氏蔵一冊本(中田)、金沢市立図書館蔵本文庫本(1066-3328) (金沢)、東大図書館(A006136) (東大)、多和文庫一冊(16-15) (多和)、万治三年版本(万治)、北村季吟『土佐日記抄』(季吟)、『校異首書土佐日記』(首書)、『土佐日記燈』(土燈)、『土佐日記考證』(土佐日記古註釈大成) (考證)、『土佐日記創見』(土佐日記古註釈大成) (創見)、『土佐日記解』(土佐日記古註釈大成) (記

解)、『土佐日記舟の直路』(直路)、『土佐日記講注』(講注)、富士谷成基『土佐日記抄』(富士)、名古屋女子大学多和文庫本『土佐日記(解)』(名古)、多和文庫『土佐日記正釈』(正釈)、国文研『扶桑拾葉集』内(国文)、函館市中央図書館三十二冊『扶桑拾葉集』(56-118-1)内(函館)、陽明文庫三十五冊『扶桑拾葉集』(近732)内(陽明)、宮内庁書陵部三十五冊『扶桑拾葉集』(151-154)内(書甲)、宮内庁書陵部三十三冊『扶桑拾葉集』(554-17)内(書乙)、白百合女子大学国文学研究室『扶桑拾葉集』(918-F96-1)内(百合)、盛岡市中央公民館三十一冊『扶桑拾葉集』(753)内(盛岡)、神宮文庫三十五冊『扶桑拾葉集』(1493)内(神宮)

『和歌體十種』高野時次氏藏本

『醒睡笑』東大図書館本(断本大系) (東大)、静嘉堂文庫本、内閣文庫本、滑稽文学全集第九卷、校訂落語全集

(おの のぞみ 筑波大学大学院 人文社会科学研究所 学生)